心癒やす人

林はきもの店 ピンチャン小路
下駄へのこだわり貫く

白山神社にほど近いピンチャン小路沿いに創業100年以上の老舗「林はきもの店」がある。下駄や草履、サンダル、運動靴が店頭に並んでいる。

3代目の林義雄さん(64)は「地方巡業でやってきたお相撲さんが『もっと大きい下駄はないのか』って、買いに来たこともあった」と子どものころを懐かしそうに振り返る。

昔懐かしい木の下駄を扱う「林はきもの店」の林則子さん(左)と林義雄さん=古町通2

今は下駄の需要も減り、買い物客も少なくなった。店番をしている林さんの母、則子さん(82)の友人や古くからの常連客が顔を出すくらいだ。

昨年アーケードを一新し、若者の店が増えた上古町商店街に面している。「昔ながらの下駄があったり、鼻緒直しをしたりしている。若い人には珍しいだろうから、のぞいてみてほしい」と林さんは期待する。

(小路マップ①)

考古堂書店の壁画 新川小路
優しく見守る良寛

良寛を専門に描く河内舟人さんの絵を基にモザイクタイルで表現した壁画=古町通4

古町通と東堀通をつなぎ、理髪店や民家が所狭しと並ぶ新川小路。東堀通から小路を歩くと、古町通に面した4階建ての考古堂書店がある。

下を向いて歩くと気付かないが、目を上方に向けると高さ10㍍、幅7㍍の大きな壁一面に、子どもたちに本を読んで聞かせる良寛が描かれている。縦3㌢、横1㌢の小さなタイルを使ったモザイク壁画だ。

新潟地震で傷んだ旧社屋を建て直す際に「みんながせわしなく歩き回る街中で、良寛さんの優しさを描いたホッとする場所にしたい」と同書店会長の柳本雄司さん(73)が発注した。

焼き物で有名な愛知県多治見市製のタイルは、40年以上たった今も色あせない。

良寛の優しいまなざしが、街の様子を優しく見守っている。

(小路マップ②)

人情横丁 新津屋小路
見どころ多彩 軒連ね

新津屋小路の真ん中にある商店長屋で「新潟の台所」として親しまれている本町中央市場商店街。59年前、生鮮食品87店が集まって開かれた。

同商店街協同組合理事長の石山要幸さん(71)は「開設当時は小路の中は買い物客でごった返して、歩くのも大変だった」と振り返る。だが郊外店の増加などで、客足も少なくなってきた。今では店舗は33軒まで減った。

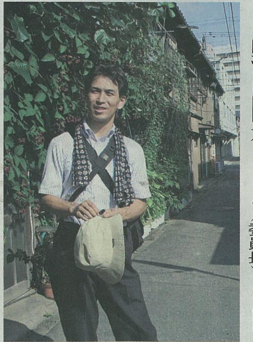
しかし商店街を活性化しようと、5年ほど前に商店街の呼び名を「人情横丁」とし「昔ながらの人と人との付き合いの濃厚さ」をPRしている。

生鮮食品のほか、ラーメンや手作り雑貨、茶の専門店などさまざまな店が軒を連ねる商店街。石山さんは「小さな店ばかりだからこそ、見どころはいっぱいある。のぞいてみると面白いですよ」とほほ笑んだ。

(小路マップ③)

写真=150メートルほどの区間に店が連なる人情横丁(本町通6)

10月開催の路地サミット 野内隆裕さん(実行委員長)に聞く



キウイや木イチゴが実を付ける、お気に入りの権現小路を訪ねる野内隆裕さん=上大川前通

思いがけぬ発見 街の良さ再認識

古町や本町には柾谷小路のように大きな道路もあれば、車が通れない細い小路もある。地元の人でも日ごろは通り過ぎる道も多いが、目を凝らして歩くと、思いがけない発見がある。

もともとは、休日に銭湯や寺を訪ねるのが好きだった。6年前、自宅がある下町のガイドを知人に頼まれ、事前に下町の小路をいくつか見て回った。その際、廻船問屋だった建物の板塀や銭湯の煙突など、印象に残る風景がたくさんあった。

白山神社の方まで散策のエリアを広げると、ただ懐かしい風景だけでなく、浜焼きが名物の店やキウイの木がある民家を見つけた。歴史や風景、食べ物など人の興味はさまざまだが、自分の好きなものが何か見つかるのではないか。

アットホームな商店街や住宅地など、それぞれの表情があるのも小路の特徴だ。小路は自分たちの街の良さを見直すきっかけにもなるだろう。

小路が交差する本町通りや古町通りに、新潟市が案内板を設置し、小路の魅力を紹介するガイドマップも作成した。小路のイラストを印刷したエコバッグを作ったり、小中学生が総合学習で小路や新潟島の歴史を学んだり、活用の事例も増えている。

こうした新潟の取り組みを新潟市で開かれる全国路地サミット(10月23、24日)で報告し、参加者に小路を歩いてもらう予定だ。「新潟と言えば小路の街。行ってみたい」と思ってもらう機会にしたい。

◇

「にいがた小路マップ」は「新潟の町 小路めぐり」(企画制作・新潟市まちづくり推進課)を基に作成しました。小路のイラストは野内隆裕さんの作品です。